

---

# Law of The jungle(仮)

柊紅葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Law of The jungle (仮)

### 【Nコード】

N19120

### 【作者名】

柊 紅葉

### 【あらすじ】

思い込みの激しい(確信犯)神様に運命を弄ばれてしまった(！？)正直幸か不幸か誰にも断定できない(…)とある元・兎の物語。

ラブコメ路線を狙いたいけど、無理なんじゃない？と、既に諦めかけている……というか、コメディの基礎を把握できてない、どの位お笑い要素が含まれていれば、そう呼べるのか自信皆無な手探り作品です。初投稿の小説なので、読みづらい事この上ないかと思

ますが、少しずつでも上達できるよう、頑張る所存であります！  
敬礼)

主要人物（前書き）

随時（？）追加する予定。

## 主要人物

### 登場人物の紹介

バナラ 15歳 (主人公)

身長は低め、というか正直ちまっこい。小動物っぽいクリツとした目の愛らしい顔、年相応より豊かめの胸、蜂蜜色の髪と翡翠色の瞳を持つ、全体的に美味しそう(！？)な女の子。本名はバナラムーン・フォン・アールヴェスト(と残念な感じなので、本編に出てくる可能性は限りなく0に近いノ苦笑)で、身分は割と高い。

ライアン 25歳

ティアベルリ帝国の皇帝陛下。成人を迎え同時即位し、正式にライアン・ルドルフ2世・フィン・ティアベルリとなった。腹違いの兄と弟、他国に嫁いだ姉妹もいるが、既に他界した母である妾妃の実は彼1人。

## 主要人物（後書き）

皆様お気付きたと思いますが、私のネーミングセンスは皆無でつ（  
落涙）どなたか良かったら、タイトルを恵んで下さい（；；）

兎 白 雪でスノー？は却下。雪ダルマ 冷たい 氷 アイス 雪  
見 いふく 餅+バニラ 白くて柔らか 兎！！バニラで！うーわ  
あゝorz

## 1・回想という現実逃避

私は、元ウサギです。

……たぶん、そう口にしたら、間違いなく万人に可哀想な子、と同情の視線を浴び、運が悪ければ隔離されてしまうかもしれない。精神異常者として。いや…完全にスルーされてしまう可能性の方が高いのだろうか？うん。それが当然の反応だと思う。ウサギという単語の意味を、正確に理解できる者が、この世界にいるか甚だ疑問だから。何故なら、この世に生まれて早十五年、ウサギという名称の生き物に、自称（元）ウサギと宣言できる私でさえ、出会えていないのだ。魔獣だの聖獣だのは（図鑑や教科書にまで記載され）認識されているというのに。

以前は身近だった存在が、未知の生物扱い。

それが、常識。ここは、そんな世界なのだ。

## 1・回想という現実逃避（後書き）

短すぎ!?

1話の文章の長さ…あんまり長いと読む力がなくなりそうだから、  
大体300程度にしようかと思ったけど…微妙ですね（焦）

基準が知りたいですorz やっぱり調べて勉強してからじゃない  
と駄目なのかなあ（遠い目）



## 2・勘違いからの始まり(前書き)

長い、かもです。前書きで宣言しておかないと、なんかの詐欺みた  
いなので(呆)自分で書いておいて、1話との落差に愕然としまし  
たorz約6倍。なのに何だろう…このグダグダ感は(TPT)

## 2・勘違いからの始まり

誰だって、似たような経験や、過去と同じような出来事が起これば、何となくその先を予想し、見当をつけると思う。私もだった。

なにもない…本当に、何ひとつない真っ白い空間。目を開けている、少なくとも閉ざしてはいないと自覚している状態で、それを認識した場合、真っ先に考えつくのは…今、自分は寝ていて夢を見ているのだ、じゃないだろうか。私も、初めて体験した時は（夢という概念こそなかったが）寝ぼけているな…早く目を覚まさなければ、と思った。暗闇　真っ黒な空間であつたなら、他の可能性もあるのだろうが、当時の経験上では現実味のない現象や物事全て、睡眠中という条件下でのみ発生している。そしてそれは決して歓迎できる事態ではない。しつかり現実を見据えなければ、総じて命が消えることに直結する。寝ぼけた草食動物など、野生の肉食動物にとって愚かにも程がある獲物でしかないのだから。自然は命あるものに優しく平等であつたが、それ故とても厳しい一面をあわせ持つ。油断は命取りだ。常に気を引き締めねばならない。

まあ結局、むなしい努力でしかなかったけれど。

私は、前世の記憶を持っています。

………たぶん誰も信じないだろう。へえ〜そうなんだ、と返してくれたとしても会話は続かず、次の日からは、目が合わなくなる

可能性が極めて高いのではないだろうか？中には自分も、と同意してくれる相手がいるかもしれない。そういうのを電波、と呼ぶ。三度目の人生で知った。それまでの生で、うっかり口にしないで良かった、と心底思う。そんな機会なんて、ありはしなかったが。だから、こんな話を無理に信用してくれなくても良い。でも結論から言わせてもらえば、私は死んだのだ。確かな事実…だった。だってコレで、三回目なのだから。取り乱したのは最初の時だけ。その時だって、暫くすると、直前の出来事を思い出す事ができ、あっさりと納得して、決められたルートを辿った私がいる。今回も、そうなんだろうと自己完結させ、油断していたのかもしれない。

）  
）  
）

「おツめでとオー！」

だから前々回や前回は出会わずに済んでいた現象に驚愕し、言われるがまま流されてしまったのだ。耳に心地よいメロディを響かせながら現れた、目の前をフヨフヨと浮遊する淡い色合いの発光体、自称カミサマとやらに。そう自分を慰めても悪くはないと思う。

私に隙があった、と言わざるおえない。相手の独断場を許す結果になったのは、自分のせいだ。どんな時も己より強者と張り合わなければいけないなら、先手必勝。始めが肝心で、最も重要なのはタイミング。もう遅かった。完全に手遅れ。あとは残り僅かの希望に縋り、大人しくするか……潔く諦めるしかない。時には諦めも大切なのである。

「アナタの生前の行いは素晴らしく… うんっ凄いな！！こんなに立派なウサギちゃんの魂なんて初めてだよ？ダ・カ・ラ・ゴ

褒美をあげちゃいまーす」

「適当だな、と思った。そもそも一体なんの事だろうか？黙って大人しく耳を澄ましてはいけない場合だったのか、対処法を間違えたかと不安になるのも、致し方無いと思う。一体いきなり何を、という心境だった。生前の素晴らしい行い、とは……そんな事をしたかどうか？全然身に覚えがないというのも、それはそれで問題なのかもしれないが。今まで生きた三度の人生、思い返してみても、それらしい記憶はない。むしろ、生き物としての存在意義を全うしきれなかった私である。どちらかといえば行い……悪いのでは??」

「そんなコトはナイよっ！確かに、アナタは1人……じゃない、確か1羽？も子孫を誕生させてナイけどっ立派な……えっと、い、偉業を達成しました!!」

「……さっきより話が大きくなっていると感じるのは、私の気のせいだ。なんか思考を読まれているような気がするのも気のせい気のせい気のせい（自己暗示）。」

「（もーニホンゴ、メンドーだよッ）えゝ誕生したばかりなのにアナタの魂は、とにかっく！ジョートー もーまんたいっ」

「…………。ここで勢いに圧倒されたら、負けなのだ。後悔しなくては……と、どこかで、もう一人の自分がぼやいている。」

「少し遠い目をしていた私に気付いたのか、コホンと咳払いする自称カミサマ（仮）は、姿勢を正し（たように感じるだけなのだ）

「一度目は貧しく飢えた者に……自ら命を絶ち、その肉と毛皮を与

え、二度目も自ら命を絶ち…怪我で動けぬ親に代わり、子の飢えを癒した。三度目は「  
などと宣いだした。

……。

……。

………なにそれ？

勘違いも甚だしかった。私は昔から語り継がれている、ご先祖様  
みたいに立派な心掛けなんぞ、持ち合わせていない。自ら命を絶つ  
て誰かを助ける、なんて真似を実行に移す筈がないのだ。だってア  
レは

まさか今更、過去の恥を思い出さねばならない事態に陥るとは、  
予想外過ぎて声も出ない。茫然自失のまま、うろ覚えな今回の死因  
及び、それにまつわる結果とやらを聞かされた。

そうして最後には、『ご褒美』を強制的に受け取らせられて、  
ウサギであった私が、今ここに人間として存在しているのである。

## 2・勘違いからの始まり（後書き）

まだ本編に辿り着けていない（主人公は只今、絶賛現実逃避中ww  
w）ので、急ぎ足になってしまったのかもしれない（反省）こ  
んな愚駄×2文を読んで下さり、有難うございました（v人v）

### 3・見解の相違と目覚め？（前書き）

今度は、1話を分けてみることにします（汗）  
試行錯誤中で、ご迷惑をおかけし、申し訳ありませんorz

### 3・見解の相違と目覚め？

三度目の死、それは確かに残念な結末だったかもしれない。本当に、赤の他人の身代わりなら……

カミサマいわく、今回の出来事で亡くなるのは、飼い主の『人間』の方でペットである『ウサギ』の私ではなかった、らしい。これは、偶然が重なって起こった事故なのだ、と。

本来なら車で出掛ける予定であり、ペットは留守番。ところが母親は急用で家を空け、予定が消えた彼女は、誰に何を告げるでもなくウサギを抱き上げ外へ向かう。少なくとも外出の際はケージに入って、運ばれるのが習慣だった。けれど、専用のリードを装着した私は、そのまま前カゴに。楽しげに語りかけられた内容で目的地が推測できる。歩いていくには大変だが、自転車に乗れば無理でもない距離。カタンコトンと揺れるのを、丸まった姿勢でやり過ごせば、到着したのは広々とした自然公園だ。美味しい若葉が生い茂る大好きな場所。リードを外してもらえたから、クタクタになるまで思いっきり走り回れて、大満足だった。

……その帰り道。信号を無視した自動車に、彼女もろとも吹き飛ばされる自転車から弾き出されたペットのウサギ。アスファルトの地面に叩きつけられれば、当たり前だが即死である。

せめてケージに入れられていたのなら、私は死ななかつたかもしれない。それは仮定の話。しかし彼女の不注意であり、致命的なミ



スだというのを、否定もできないだろう。でも、恨むような気持ちには微塵もなかった。結果として彼女の身代わりになれたのなら、むしろ本望だろう。

私を一番可愛がってくれたのは彼女だ。そして生まれたばかりの私の命を救ってくれたのも、幼い彼女。今更だが、私の名前は満月<sup>まんげつ</sup>と呼ばれる度、ソワソワしてしまうその名には、由来がある。

ある月の明るい夜、私は拾われた。臍<sup>へそ</sup>氣にしか覚えていないが、生まれたばかりの私は、タオルにくるまれ、ゴミ捨て場に棄てられていたらしい。鳴き声一つこぼさない私を奇跡的に発見した彼女は、家に連れ帰ってくれたのだ。そして真つ先に名前を付けた。オスでもメスでも大丈夫な名を。渋る両親も、そんな彼女を見せられては、私を飼うことに反対できなくなってしまったことだろう。次の日、動物病院に連れて行く約束をし、暖かい彼女の体温を感じながら…  
…眠りについたのである。

言い表せない程の安心感に包まれて

#### 4・見解の相違と目覚め? (前書き)

やっと、お相手その1その2を登場させられましたが、肉食と草食の関係(は?)なので恋愛要素(というか会話さえも)皆無です(土下座)

ようし!!ラブコメの定義を言ってみろ!と叱られそうな内容です  
ミマセン(落涙)

#### 4・見解の相違と目覚め？

そんな彼女が死なずに済んだのなら、嬉しい。でもそれは、私が進んで身代わりになった訳ではないのだ。なのに、その対価が『ご褒美』……つまり人間としての新たな生だという。この流れで人間になれるなんて楽しみです！ありがとうございます！などと素直に展開を歓迎したり感謝すると考えているのだろうか？まさか、と思うのだが　まあ、それはいい。いや、良くはないけど、それ以上に理解し難い話があるのだから、大事の前の小事としておく。そう、大問題なのは、大いに誤解しているようで、恥の上塗りになりそうな釈明が必要だと思われる、今回よりも前の三度目以前の内容である。

最初と二度目は、野生の兎だった。それも三度目と同じく真っ白な姿であった為に、草原にいても森にいても目立ってしまう、かなり生き辛い野生動物である。常に生と死、ギリギリの境界線で生きていたのだ。

一度目に生まれたのは、それほど広くもない森。物心ついた頃には、ひとりになっていた。きっとそれは仕方のないコトなのだろう。私の親も兄弟達も同じく真っ白で、時々森を訪れる人間に標的とされ、狩られてしまったのだから。私は運良く免れて生きていたが、敵は人間だけではない。知恵を絞り、毎日を生き延びる事に必死だからアレは恥でしかない。勢いよくぶつかった切り株の根っこによって、首の骨を折り死ぬなどという愚行なぞ。

あの日、全力で逃げていた。私にとって、逃げるという行為自体は恥じゃない。生きたいと望む本能に逆らえないのが生物だと思うから。でもあれは…屈辱でしかなかった。逃げ切れれば生、逃げそびれば死、それが当然であり　　当たり前だというのに。例え、逃げ切れなかったとしても、多分、私は生きている。何故なら追いかけてきている相手は、捕食するのを目的としていない。

随分前、死を覚悟した。この森で、最も狩りが得意だと噂される、二匹の双子狐に捕まってしまったのだ。散々抵抗し、その度に咬みつかれ、隙を狙い逃げようとしても逃げ切れず、とうとう自棄になった私が願うのは、早く楽になる事で。食べるなら、さっさと、この身を食べなさい、と泣きながら叫ぶ。(今思えば最後の言葉としては往生際が悪すぎて失笑モノだ。)するとどういうわけか、二匹は私の傷ついた体を舐めるだけ舐めて、立ち去ってしまった。呆然とする私は、暫くしてからハッと我に返り、ヨロヨロと立ち上がる。それからボロボロの体を引きずって、巣穴へと戻ったのだ。せつかく拾った命。無駄になどできない。

それから二週間後、私の傷も漸く癒えた頃、屈辱の日々が始まった。彼らは私を見つける度、追いかけて回すようになり、捕まると甘噛みしたり、全身を舐めてくる。逃げようとすれば捕まえてくるのに、決して食べたりせず、私が必死で抵抗するのを楽しんでいる様子だった。ただ追いかけて捕まえる、そして気が済めば逃がすという……お前なんかの命など、簡単に奪えるのだと、からかうような行為。きつとそれは、彼らの新しい遊びなのだろう。

それに甘んじて生きている自分に泣きたくなくなった。

## 5・見解の相違と目覚め？

それでも、なんとか生きていたというのに。気付けば森から飛び出していた。そして拓けた場所だからと油断し、あんな間抜けすぎる死に様を晒すとは……

死んでしまつてからの事など、知る筈もなく。きつと追いかけてきていた狐にでも食べられたのだ、そう思っていた。……………。

まあ、何と言うか：あんな性悪共の血肉になるより、困っていた人の助けになつたのなら、まだマシだつたと思うべきだろう。

二度目に生まれたのは、どこまでも続く草原。生後間もなく、また私はひとりぼっちになった。家族は皆、茶色の野ウサギだったが、私だけは異端。だから無難という言葉だけで片付ける事も可能な話丈の低い草に覆われた大地で、真っ白な私は恰好の標的。一緒に行動していれば、狙われる確率は倍増する。私だけの為に多大なリスクを負うより切り捨てる方を選ぶ。自分自身でも容易に結論が出てしまつたから、家族の選択は当然の行動だつた。

しかし、普通ならすぐに野垂れ死ぬのかもしれないが、過去の記憶を持った私は大きくなるまで、しぶとく生き延びたのだ。そして更なる安全を求め、遙か遠くにそびえそびえ立つ、木々が生い茂つた山を目指した。今度こそ平凡な日々を手に入れ、暖かい家族に囲まれて過ごす穏やかな老後と、平和に迎えるだろう寿命を夢見て

だから、ある程度の苦難は予想していたが、あんな結末を迎える

ことになるとは、夢にも思わなかった。

道中の出来事は省かせてもらおう。色々あったのだ。そう、色々（虚ろな眼）苦勞の末、やっと森に辿り着いた頃には、一冬を越えて春の芽吹きが訪れていた。出発したのは初夏。自身の無力さ加減を痛感するが、無事に到着しただけ上出来　　だというのに。

熊の子供に捕食された。その事実こそ偽りのない真実。だが、経緯はだいぶ違う。私は誰かの為に自ら命を絶つような聖人君子、ではない。けれど、目の前で消えそうな命の灯火を無視できる程、冷徹にもなれなかった。間抜けにも凍っている湖の落とし穴にはまつた弟と、岸でオロオロと助けを求める姉に手を貸したのだ。逃げられるであろう距離をとり、少し知恵を貸しただけ…のつもりだった。長い蔓草か枝を用意させ、お互いに端を銜えて引つ張り上げれば良いと。しかし姉弟は生まれて間もないのか体格に大差はなくて、彼女の力だけで助け出すまでには至らず、食べたりしないという姉の言葉に、微力ながら協力したのだ。言い訳の様だが、完全には信用していなかった。結局、彼女に襲われ、捕食されたのだ。体力を消耗した姉弟が眼前にある恰好の獲物を見逃してくれるなんて、野生動物の正しいあり方ではないと自覚している。だから恨んでこそいないが……後味は最悪というものだ。

自分の甘さを身にしみて実感する人生だった。

## 5 ・見解の相違と目覚め？（後書き）

お久しぶり過ぎて、大変申し訳ありません（T\_T）もう少し、後2話くらいで回想は終わらせる予定です。他お相手との出会いなどは、人間ver.で接触してからに…行き当たりばったりな鈍足でスミマセンツツ（吐血）

## 6・見解の相違と目覚め？

これが私という存在を、自身で認識してからの全てだった。何一つ、誇れる事柄なんてない。

そんな私にカミサマが言うのだ。アナタは素晴らしく立派な魂である。呆れ過ぎて、反論する気概も湧かなかった。このカミサマ（仮）は、一体どんな節穴だらけの目をお持ちで？或いは、極端な湾曲術の使い手？それとも世の中には善良な者しかおらず、自ら命を絶つような行動は、誰かしらを救う為だと信じて疑わない極論主義者だったりするのだろうか？？グルグルと考えている間にも、自称カミサマの話は続いてく。

要約するなら、一つ「魂は何度も現世で生死を繰り返して成長する」、二つ「生まれ変わっても同じ生き物のままである」。ご先祖様を尊敬していた過去のウサギたち 残念。三つ「世界は無限にあり世界ごとに生まれる姿が変化する」、つまり私は今までと違う世界で人間としての生を与えられる、という話だった。コレって……喜ぶべきなのか？疑問である。なぜなら私は、ウサギとして生きた三度の命に後悔がないのだ。ちっぽけな小動物として存在し、ありきたりの日々を全力を尽くして、誰にも誇れはしないだろうが、自然の摂理に逆らう事もなく終えた生に、呆れこそすれ不満なんてなかったから。

ついでに人間という生き物への憧れもない。だって何だかあれはあれで大変そうなのだ。特に三度目で知った人というものは、毎日



々、時間に追われるように学び、働き、遊ぶ、を繰り返している。上手く言葉で表せないが、常に余裕というものはなく、見ているだけでも疲れてしまう。野生のウサギとして生活していた以前は、私も生き延びる為に必死だったが、それは当たり前なのだから、別に苦じゃなかった。(…ん。多少無理がある強がり発言だと自覚するので、触れないでくれれば有難い。)

知っているのは僅かな一部で、全ての人間がそうではないのだからうけれど、少なくともあんな生き方をしたいとは思わない。十分、充実した毎日を過ごしていた私。新鮮な餌に適度な水、自由な時間や暖かく安全な寝床まで、飼い主である彼女に癒やし、と呼ばれるナニカを提供すれば、手に入るのである。それさえ、こちらが何かをしなくとも、自然に得ているようなのだから、不思議なモノだ。正直、怖い位快適だった。

しかし、そんな私の意思など全く顧みず、えいっという掛け声と共に、吹き飛ばされるような感覚を味わった瞬間、私の意識は途絶える。だから

『私の可愛い愛し子。たっぷり幸せになって、早く私の下へ帰っておいで』

などという、なんとも愉しげなカミサマの囁きを、知る術はない。遠退いた意識が戻り、いつの間にか閉じていた瞼を上げると

「ふふ、おはようバナラ」

聞こえた優しげな声に、心の中で溜息ひとつ。

こうして私の新たな人生が、幕を開けたのだった。

## 7・道理と感情論の比重

気がつけば、人間の赤ん坊になっていた。バニラムーンと名付けられ、愛称のバナラ（聞き覚えはある。何の事だっけ？）と呼ばれているらしい。その名を呼んだのは母で、声同様に優しくそうな人だった。実際、優しく暖かな存在で。それから父と兄、それが現世での家族である。色々と思うところはあったが、まるで絵に描いたような幸福、としか言えない生活を手に入れたのだ。自分の現金さに情けないとさえ感じるけれど……たとえ、どんな意図や思惑があるかと構わない、そう思ってしまった。あのカミサマが間違いに付き、正しにやって来るまでは、堪能しなくちゃ損だろう??と。確実に幸せの絶頂、今までで一番長い生を謳歌していたのだ。

そんなバナラの人生に暗雲が立ち込めたのは十五歳の誕生日。国から成人を祝して届くカードに添えられた一通の招待状。現実逃避に走った原因である。

ティアベルリ帝国。この世界で最も権力を持つ大国。私が生まれ育った場所。治するは、ライアン・ルドルフ2世・フィン・ティアベルリ。先代が病で崩御し、若くして皇帝の座に就いた君主だ。その座に就き数年で、近年稀にみる名君と呼び声高い彼だが、一つだけ問題があった。側近たちを悩ませている唯一の欠点。まあ、ここまで言えば大体の予想がつくだろう。皇帝陛下、御歳二十五……皇妃どころか寵姫の一人も娶っていないのだ。

基本、一夫一妻制の国ではあるが、一夫多妻という特別措置を、

例外的に認める場合の代表が皇帝陛下、その人だった。なにせ後継者を残さねばならぬ立場。過去に女王が存在した隣国と違い、自国ティアベルリ帝国で継承権を持つのは、男子のみ。皇妃殿下が男子を授かれれば、一夫一妻を貫くことも可能らしいが、それはなかなか難しく、現に愛妻家として極一部では有名な前皇帝も、妾妃を数人娶っていたそうだ。

余談(?)だが、その妾妃が産んだ男子が現皇帝である。彼は前皇帝の次男であったり、その下に皇妃の息子である元皇太子殿下もいらっしやるのだが、その辺の事情は私が生まれて間もない頃の話であり、国家機密らしいので、詳しくは語るまい。国の中枢に関わっている筈のない私のような小娘が、重要とされる事柄を何故知り得るのか：大した理由がある訳でもないのです、今は秘密。なんでも秘密の多い女はミステリアスで魅力的、だそう。前世での飼い主の受売りだが。っと、話が脱線してしまったので元に戻すと、元凶は現皇帝陛下の女性問題、という訳だ。ちょっと違う? いや……話をはしより過ぎただけ、かな??: うん。

彼が独身な理由を下世話な噂話から推測するなら、最も可能性が高いのは女嫌い(根本的な解決策はないだろうが、どうとでもなる問題だ。寧ろ不説の方が有力だと思う。しかし、流石に国家の根本を揺るがしかねない、かつ、反逆罪に問われそうな内容を声高に発言できる愚か者はいない。それに名君は歓迎される存在で、陰口を叩くのは極めて少数派、それも大部分は国の先行きを案じて……ではなく、無意味で情けなささえ感じる嫉妬や妬みが発端なのだから、信憑性に欠けていた)。次点で逆に好色過ぎて、お手つきの女性を全員娶ったら国家が破綻、一部を娶って他からの不満が爆発(確かに皇帝陛下に手を出される機会が多い女性は、ある程度身分が高く、その親は自分の娘を皇妃に、または妾妃に、その可能性を充

分に考慮して送り出しているだろう。それを中途半端に人数制限されては、理由を理解していたとしても納得できない者が続出しても無理はない）してしまうのを防ぐ為。秘密裏に問題を解決させようと有能な側近達が現在、暗躍している最中だなどと、真しやかに囁かれていた。

…して、その真実は どちらも不正解、だった。真相を知っているなら勿体ぶらず、教えればいいと思うかもしれないが、噂は重度のロリコン説、シスコン説、マザコン説と各種、取り揃えられているのだ。その中から、なかなか事実に近い、内容を深く吟味していけば、もしかしたら正解に辿り着けるかもしれない、というものを紹介してみたのである。どれだけ多くの噂が出回っているかを知って頂き、如何に私が真相を確かめるのに苦労したか、真実を知った時のガツカリ感を共感して欲しくて。

自己満足で申し訳ない。そもそもものきっかけは、偶然耳にした皇帝陛下の噂。

当時、暇を持て余してたバナラが、個人的に情報を集め、事実を知っただけ。他国の諜報機関に所属している筈もなく、誰かに報告する義務はない。悪趣味かもしれないが実益を兼ねた暇つぶしではないのだ。

皇帝の好みは高望み……いや、国の頂点に君臨するのだから、この場合、高望みというより、理想が高、では同意語だった。そういう意味合いではなく、好みに著しい偏りがあるらしかった。偏食家、ではない。月に何度かお忍びで専門職の方と一夜を共にするそうなので、女嫌い説と共に除外される。しかし一夜を共にした女性が、次を指名される事は無いそうだ。文字通り、一夜限り。ストラ

イクゾーンとやらが極端に狭く、好みに合った相手以外を娶る気がないらしい。よって好色説も当てはまらなかった。国にとっては由々しき事態であるにも関わらず、完全に好みの女性を皇妃に迎え、絶対に後継者の男子をもうけさせる、と一体どこからその自信はくるのだろうかと疑問しか浮かばない宣言を、皇帝陛下は彼の側近にしているようなのだ。勿論、公には知られていない。彼らだって、それが強引で無茶な話だということは、きっと理解しているのだろう。ある程度、皇帝に付き合いながらも、妥協策を導き出す。

その結果がコレ。彼が皇帝陛下となつて十周年を記念して催されるセレモニーという名の嫁選び。満十五歳、成人女性は全員参加可能なパーティーの招待状とは名ばかりの召集命令書。未婚者限定にしていないのは感づかせない対策かもしれない。しかし、あからさまだと感じるのは私だけではないだろう。それとも人妻歓迎とばかりに見境が無くなる位、切迫しているのか？どちらにしろ、バナラにとつては、不幸しか招かなそうな手紙だった。

## 7・道理と感情論の比重（後書き）

待っていて下さった方がいた事に驚愕と恐縮、感涙が止まりそうにありません。まだまだ見せ場（やっぱり恋愛要素満載の絡みですよね？）に辿り着きそうにない現状に真ッ青ですが、無理矢理にでも絡ませてやろうかと模索中です。展開を切って繋げて、また切つてと…初オ리지に完成度なんて、私の実力じゃ求められそうにないんだから、娯楽性を追求せねばと焦りつつ、トキメキ要素皆無な自分自身を省みて、悟りの境地（遠い目）

## 8・道理と感情論の比重

この国で私は貴族と呼ばれる立場だ。皇帝陛下を除けば家柄は上から三番目。その事実を知った当時は、あまりの不相応さに目眩がしたものだ、それは過去の話。どうにもならないのだから考えても無駄。こんな事でもない限り、思い出すこともなくなっていた。

皇帝に娶られる条件には、第一に貴族の令嬢であることが大切らしい。どこの世界も身分というものを重要視するのだな…と呆れ半分、一応は納得している。

国の頂点である彼の隣に立つには、本人がどうこうというよりも、そのバックグラウンドとやらが問題なのだ。この世界の構造に関わる事情であり、どうにも対策がたてられない（裏技に近い方法も一応あるが）のだから仕方がない。皇帝陛下の最も身近に存在する歴代の妃は、皇妃の資質を問う以前、彼へ危害を加える可能性の有無を前提に、選ばれていたりする。

この世に絶対の安全はない。簡潔に言わせてもらえば、嫁ぐ花嫁の親族は人質。国家の保護という監視下に措かれた貴族は、家系身内を管理しやすく、人質には最適らしいのだ。何とも薄ら寒い話である。

そんな裏事情を把握しているのかいないのか……多分当たり前すぎてソレを強く意識する者など極僅か。それこそ悪意でも持っていない限り、無関係なのだ。結局のところ、誰もが権力に弱い。全て

を承知の上でも、自慢の娘を是非、そう皇帝に差し出すのだろう。まるで他人事のようにだが、当事者だからこそ客観的でいられる場合もある。それが今のバニラ、だった。そう、まさに当事者なのだ。

この招待状、ある程度身分の高い貴族宅へ、無作為に配られたとされるが、実際には中々どうして、配布先が意味深過ぎた。独自ルートで知り得た情報によれば、家族同伴自由と謳う、若い未婚女性宛てのモノが、計100通ほど用意されているらしい。無作為なのは、それ以外（その中には社交界で華々しく活躍？中の美貌を誇る既婚女性も、私を知る限り全員含まれていた　　やっぱり人づゝ…いや、何も言うまい）の招待状。年頃の娘を持つ貴族に対しては、予め制限された数しか配布せず、明言を避けつつも自然な流れで事前に争いの芽を摘む手腕は、流石だと思えた。しかし詳細を知る術がなく、そこまでの意図に気付けなかったとしても、皇帝が独身の状況で【満十五歳、成人女性は全員参加可能】となれば言わずもがな、だ。

察せないようなら、貴族という地位にいる現状を、奇跡と呼んでも過言ではないと思う。オロオロしている使用人をよそに、親の仇とばかりの鬼気迫る表情で、毎朝ポストの前に待機する貴族（総じて娘がいる親）という滑稽な場面が作り出されたのは当然の結果だ。例をあげるなら、三つ年上の従姉に誕生パーティー（という名の自慢大会、またの名をプチ社交界in腹黒予備軍令嬢の集い）の招待状を直接（要は先手必勝）届けようと出向いた先で、陽は昇りきったというのに、血走らせた目の叔父上殿が、玄関先で仁王立ちする姿を偶然にも目撃して、溜め息一つで自主的に記憶を削除し、急遽予定を変更した彼女が思わずうつすらと浮かべてしまったのは、嘲りの表情や失笑の類いでもなく……涙だった、という具合である。母に婿入りした父を常に上から見下している相手だと知っていたが、



それはそれ、これはこれ。各所で似たような光景が繰り返り広げられると理解していたけれど、やるせない気持ちになるのは仕方ない。こうして頭痛の種と認識された厄介な代物がバニラの元に届いたのだ。勿論それが全てではないけれど、現実逃避の一つや二つや三つや四つ、したって誰も文句を言えないと思うとは、あくまで彼女の言い分だった。

## 8・道理と感情論の比重（後書き）

お相手は！？（。口。；

あまりの鈍足に言葉もありません。まさかの評価を頂戴致した（日本語？）という事実にも声もでません。上記二点、意味合いも価値も天と地ほど差がありますが……お気に入り登録を下さっている方々同様、本当にありがとうございます！誠に感謝です！（正しい日本語使ってる？）嬉しさで舞い上がり、不相応さに拳動不審になっている私は、使い物になりそうもないので、そろりと失礼します。

次こそ主人公以外の元アニメルを登場させます。なんとしても。だ  
いぶ本来の予定とは、かけ離れてしまいました。開始して随分経  
つのに、話の中で一日も経過してないとか、全然笑えない事態です  
orz 気長に待って下さっている優しい皆様、申し訳ありません  
っっ

## 9・道理と感情論の比重

ここで問題となるのが私の家の現在の状況だ。簡単に説明…は、少々複雑なので難しいけれど。先程軽く触れたが、今でこそ婿の父を当主としていても家名を継ぐのは本来、母の役割。

貴族の中では珍しく天涯孤独の両親を持つ彼女の母親は、母が幼い頃に病で亡くなった。唯一の肉親である父親も、彼女が成人を迎えるまで耐えていたかのように、母が十五になって間もなく、妻を後追いするような形で病を患い、この世を去ってしまったのだ。彼女に残された選択肢は、相続した財産に群がる者を牽制し続けるか、信用できる相手との政略結婚。没落するのも時間の問題と、陰で囁く悪意にさえ追い詰められている母へ、救いの手を差し伸べたのは大方の予想通り父だった。幼馴染みという立場に、相思相愛である彼女との間に立ち塞がった障害が、長男の責務といえる彼の跡取り問題と、母の方が家柄的に上という身分差だった。なんて事情は蛇足だろう。それまで息を潜め、力を蓄えていた父の手によって、一気に展開がひっくり返ってしまったらしい。その華麗な早業に惚れ直したという、熱っぽい語り口での乙女発言は、今も変わらず彼女の思い出話の定番なのだ。

そんな訳で、高い身分故の煩わしさと共に、しっかりとした地盤もないのが、我が家の現状である。

力ある後ろ楯が存在しないのは、やっぱり心許なくて。いざという時、など考えたくもないが、すがれる藁の有無は大事だと思う。

早計かもしれない。だが、権力者と結婚して血縁関係になるというのは、即効性の高い解決策である。そんな事情まで把握しているからその招待状、なんだろう。此方の利点が明白で、彼方にも利点があった。

下手に有力貴族の令嬢を皇帝陛下に嫁がせては、様々な点で支障を及ぼす。ましてや、選り好みの激しい彼の皇帝からの指示ではない。恐らく側近たちが考えた、跡取り問題解決の打開案だ。皇帝陛下好みな皇妃を見つけるまでの繋ぎとして。そんな立場を納得する令嬢なんて、ねえ？真実を知らなければ良いのかもしれない。だけど話に聞く限り、あの皇帝は最初から宣言してしまいそうだ。嫌々娶る、子を成せばお役御免（本人はともかく、親族に後見人となれるだけの力があれば、別に支障はないだろうが）の妾妃だと。適材適所、私向き。ここまでの情報を、私のような小娘が有しているとは、想像し得ないだろうし、競争率も限りなく高いけれど、目指してみる価値はあると思う。

十五年という長い間、家族という幸福を与えられ、何不自由なく過ごさせて貰ったのだ。恩返しの一つぐらいしたいではないか。

父も母も、そんな事は望んでいないだろう。普段の言動や性格からして、自分たちの子供も純粹に想い合う相手と結婚する事を願っているようだ。だからこれは、自己満足でしかない。ある意味、親孝行どころか親不孝とさえ言える。しかも狙う標的が皇帝陛下。無謀で不毛だと、自覚済み。

実際のところ、バナラにしてみれば、皇帝などと大それた人物じゃなくても、それなりの相手なら、誰でも良かった。愛人は無意味なので論外だが、後妻なり二番、三番目の妻とかだつて大歓迎。そ

う考えて色々候補を探していたのだけれど、結果は空振りで惨敗条件に当てはまる人物もいるにはいたが、どうやっても接点を作るのは不可能だったり、私の力不足　　いやバナラには、どんな（二回り以上の年齢差があるうと、好色家で危ない趣味をお持ちと噂されてようと　ただし生命の危機に直結する内容は除く）相手であつても、全然余裕だと妙な自信さえある。

「あのカミサマの目的って…私への嫌がらせ??」

そう、バナラが疑心暗鬼に陥る程に、元・動物率が高くなければカラスや毒ヘビ、ハイエナと、ウサギ時代は出くわさなかったにも関わらず、見事な天敵揃い。外見から察せれる者もいれば、全く共通点がない者（でも何故か元・動物の彼らは皆、見目が一般的美醜感覚において、平均値を上回っていた。んん??）もいたり。しかし総じて、どうしてか私には本来…：…いわゆる前世の姿が、分かってしまうのだ。

ありがた迷惑、極まりない。当時は生きて行く上で必要不可欠だった、生存本能と言うべき生理的嫌悪感が邪魔をし、とても家族の目を欺ける程、彼を愛している演技など出来ないし、困った事に確信できる。その点、まだ見ぬ皇帝陛下が万が一、元・動物だったとしても相手は国のトップ。多少顔が引きつったって、緊張してるからだと誤魔化せるだろう。冷や汗をかこうが、鳥肌が立とうが、思わず逃げ（…）出そうが問題ない、のだ。…：…多分。

そもそも、この世界には何故こうも前世が動物、という存在が多いのか。　　もう身近に三人いるのだ。この内の一人、何を隠そう

「（噂してないのに。想像だけでも影ってコト?）」

パンツと音をたて、勢いよく開いた扉から、部屋に飛び込んできた彼は

「ああっ僕の可愛いバナラ！遅くなっでごめんね？？お誕生日おめでとつ」

プレゼントだよと、両腕に抱えていた二体のぬいぐるみ、それから、たっぷりのリボンで飾られた大きな箱を差し出してくる青年は「ありがとう。とっても嬉しいわ。でも、ノックはしてね？レオ兄様」

二度目の生で、兄弟だった元・ウサギ。私、バナラの実兄、その人である。

## 9・道理と感情論の比重（後書き）

登場したのは、期待を完璧に裏切り、バナラ兄でした（・・・）  
この方も相当イタタな方ですけどね？トーゼンしすこん。次回は兄  
と…もう一匹（こ、今度こそ）出せれば出したい（弱）

当初は脱兎の如く逃走し、他国で特技を生かして働き、評判を聞いた  
様に拉致された場面から物語が始まる予定だったのですが…  
??なんか全然違う展開になって、る？予定は未定、素敵な言葉だ  
と思います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1912o/>

---

Law of The jungle(仮)

2011年8月6日15時30分発行